

## 山陰海岸ジオパークマネジメントプランの検討と方向性

### The San'in Coast Geopark Management Plan: Review and Orientation

中橋 文夫\*・糸谷 正俊\*\*・日置 佳之\*\*\*・新名 阿津子\*\*\*\*・杉山 真魚\*\*\*\*\*

NAKASHI Fumio, ITOTANI Masatoshi, HIOKI Yoshiyuki,  
NIINA Atsuko, SUGIYAMA Mao

**要旨：**本研究は山陰海岸ジオパークマネジメントプランの策定を目的とする。3年計画とし、本年度は検討と方向性をとりまとめ、来年度の完成を目指す。第Ⅰ編では、研究に取り組む視点と方法を整理した。第Ⅱ編では、日本造園学会全国大会分科会を通して問題点と課題の整理、並びに高知県室戸ジオパークと山陰海岸ジオパークを管理する7市町のヒアリング結果をまとめた。第Ⅲ編では、ジオツーリズムによる地域振興、文化施設の考察、エコツーリズムのあり方、ジオサイト（摩尼山）の国立公園への組み入れ方について検討を深めた。第Ⅳ編ではこれらの成果を受けて、マネジメントプランの方向性をとりまとめた。

**【キーワード】** ジオサイト、法定計画、ジオツーリズム、眠れる資源

**Abstract :** This study formulates a three-year management plan for the San'in Coast, with review and orientation coordinated this year and completion scheduled for next year. Section I sets out the perspectives and methodologies for the research initiative. Section II reviews challenges and issues by setting up a sub-committee at the annual meeting of the Japanese Institute of Landscape Architecture. Section II also summarizes the results of interviews conducted in the seven cities and towns that manage the San'in Coast Geopark and Kochi Prefecture's Muroto Geopark. Section III gives deeper consideration to geotourism-based regional development, deliberations on cultural facilities, the potential for ecotourism, and ways to incorporate national park geosites (e.g., Mount Mani). In response to the results of these considerations, Section IV summarizes the orientation for the management plan.

**【Keywords】** Geosites, statutory plans, geotourism, dormant resources

#### 1. (公社) 日本造園学会全国大会分科会の検討<sup>1)</sup>

2012年度(公社)日本造園学会全国大会分科会において、山陰海岸ジオパークのマネジメントプランのあり方を検討するために、学識者・行政・専門家をお招きし「山陰海岸ジオパークのマネジメントプランの方向性を探る」と称するミニフォーラムを開催した。構成と討論会の出演者は次の通りであった。

日 時：2012年5月20日(日)

場 所：大阪府立大学

第1部：基調講演

三田村宗樹(大阪市立大学大学院理学研究科教授)

第2部：討論会

コメンテーター

\*鳥取環境大学 \*\*NPO 国際造園研究センター \*\*\*鳥取大学 \*\*\*\*鳥取環境大学地域イノベーション研究センター  
\*\*\*\*\*鳥取環境大学/京都大学

糸谷 正俊 (NPO 国際造園研究センター常任理事)  
今西 純一 (京都大学地球環境学堂助教)  
久野 武 (関西学院大学総合政策学部教授)  
中谷 英明 (鳥取県観光政策課山陰海岸世界ジオパーク推進室長)  
三尾 尚己 (環境設計(株) 主任)  
コーディネーター  
中橋 文夫 (公立鳥取環境大学教授)

## 討論内容

討論会にはコンサルタント・学識・行政の方々に参集賜った。糸谷氏からは、広大な面積を持つジオパークにおいて、ランドデザインの重要性を指摘された。糸谷氏は長らく緑の都市計画プロジェクトに従事され、特に阪神・淡路大震災、中越大震災の研究実績により、日本造園学会賞の荣誉に輝かれ、わが国の防災緑地計画の第一人者である。

関西広域連合においては、それぞれのエリアの特性を活かしてネットワークを形成し、どこに行っても何かがあるような地域計画が必要だ。ともすれば山陰地方はカニで終わるところだが、それぞれの地域における役割分担、評価のステップアップの考えが重要であると述べられ、広域的なマネジメントプランの必要性を指摘された。

久野氏からは、自然公園とジオパークの違いについての説明があった。国立公園などの自然公園は優れた自然の風景地を土地の所有関係にかかわらず指定し、保全活用を図ろうとするもので、地域振興策として貢献したが、数多くの自然公園が指定されることにより、近年では自然公園というだけでは陳腐化過ぎて集客力が乏しくなった。

そこで注目されたのが国際的なブランドとしての世界遺産とジオパークであろう。世界遺産は審査条件が厳しく、富士山が未だ指定されないほどハードルは高いが、ジオパークはそれほど高くない。ただジオパークは市町村域全体とされているだけで、具体的な保護規制がなされているわけではないなど、保護区域としての実態に乏しい。

次に言えることは、現時点ではジオパークは実体的な管理主体が明確ではなく、県及び市町村の観光部局などが集客宣伝、普及啓発のネタにしている段階であり、統一した事業執行力がないことを指摘された。その点、国立公園は法律に基づいた保護規制や利用施設整備がなされ、具体的な運営方針については管理計画を策定されるなど事業力が高いと説かれ、ジオパークはそのコア地域について、協働型のエコツーリズムを推奨するなど、環境省の国立公園管理と一体的に運営されるよう推奨された。

山陰海岸ジオパークにおける、国立公園が占める面積は4%しかない。これが現実である。残りの96%についてはジオパークとしての保護保全はまったくなされておらず、点的に文化財など他法令による保護がなされているがまったく不十分である。せめてジオサイトには何らかの保全策が必要であると指摘され、摩尼山の国立公園区域への組み入れの課題に対しては、鳥取県が案を作成し、環境省に申し入れたら良いと述べられた。

中谷氏からは、鳥取県の浦富海岸エリアの遊覧船、ガイド育成などが地元を盛り上げていることから、ソフトプログラムの重要性を指摘された。しかしながら山陰海岸全域を見れば、冬はカニの観光で各地域が集客を競う状況にあるなど、東西地域の交流について取り組まなければならないと述べられ、また、官庁でも所轄部局が環境・地域振興・観光と異なり、ジオパークへの関わりや、視点も違うのが現状で、関西広域連合参入を機会にジオパークへの取り組む姿勢を改めていかねばならないと結ばれた。

今西氏からは、海から山に至る多様な自然を活かして、景観生態学の視点から自然資源の保全活用の重要性を指摘された。とりわけ、海と陸の植生回復に配慮した青谷町のダイキンアレスのランドスケープデザインを例に挙げ、砂浜、樹林地などのエコロジカルデザインの特長、利点について述べられた。また、投入堂で知られる三徳山には積雪のため低い標高から見られるブナ林があること、ジオパークの内陸部にはイヌワシやツキノワグマなどが生息することなど、自然の豊かさについても説かれた。

最後に三尾氏からは、吉野熊野国立公園大台ヶ原及びその周辺地域の魅力発見、地域振興策として、エコツーリズムの実践策をうかがった。大台ヶ原では頂上部の自然保護区域に観光客が集中し、麓の旅館民宿街から観光客が遠く現象を招き問題となっていた。その打開策としてエコツーリズムを導入したとのこと、それまでに頂上と麓に分かれた観光客を繋ぎ、大台ヶ原の循環利用を実現したのである。成功の秘訣は地元の方々の熱意であり、今後の課題はガイドの養成が挙げられると報告された。

会場からは奈良文化財研究所の平澤氏から情報発信が重要との指摘を受けた。

このような報告を受け、山陰海岸ジオパークマネジメントプランの方向性として、事業力充実のために法律の整備、法定計画の策定、ソフトプログラムの充実などが明らかになった。これらに加えて、マネジメントを運営する上で誰からも共鳴賛同が得られる「理念」、公平平等な「組織」、税金に依存しない資金獲得の「財源」、そしてPDCAに繋がる「評価」のあり方などを明らかにし、

マネジメントプランを策定していく所存である。

## 2. 高知県室戸ジオパークの調査

室戸ジオパークは2011年度にジオパーク世界ネットワークに登録された、我が国で4番目のジオパークである(写真1)。その特徴とマネジメントの把握を目的に、2012年8月16日～18日にかけて現地調査を行った(図1)。以下に報告する。

### 2-1 室戸ジオパークの概要

室戸ジオパークは高知県東部の室戸市に立地し、室戸岬を中心にして面積は248.3km<sup>2</sup>で、山陰海岸ジオパークの1/10程度の面積である。室戸ジオパークの特徴は海成段丘にある。今から4,500万年前の海面は現在よりも10m程高く、繰り返された地形の隆起により段丘が形成され、海岸は削られ崖が形成され今日の地形地質を見る。<sup>2)3)</sup>

室戸岬で最も迫力のある岩礁景観が、天を突く地形地質のタービダイト層である。混濁流、あるいは乱泥流によって運搬・堆積した地層で、砂岩と泥岩の互層から成る。また脱水による皿状構造や生物活動の痕跡などの生痕化石を見る。

エボシ岩は見ての通り、烏帽子に似ていることから名付けられた。室戸がまだ深海にあった頃(約1,400万年前)に、海底下でマグマ活動が起こり、マグマが地中で冷えて固まり、斜長石や輝石の大きな結晶からなる斑レイ岩が出来た<sup>4)</sup>。その様子が地層から見て取れる。

ビシャゴ岩は大地が盛り上がる様子が一目でわかった。力強い隆起の地形景観は付加体そのものである。侵食が顕著な岩礁景観に至るところで見た。黒と白の縞々模様は美しく、自然が織り成す彫刻のような印象を受けた。



写真1 室戸ジオパークを海から見る<sup>2)</sup>

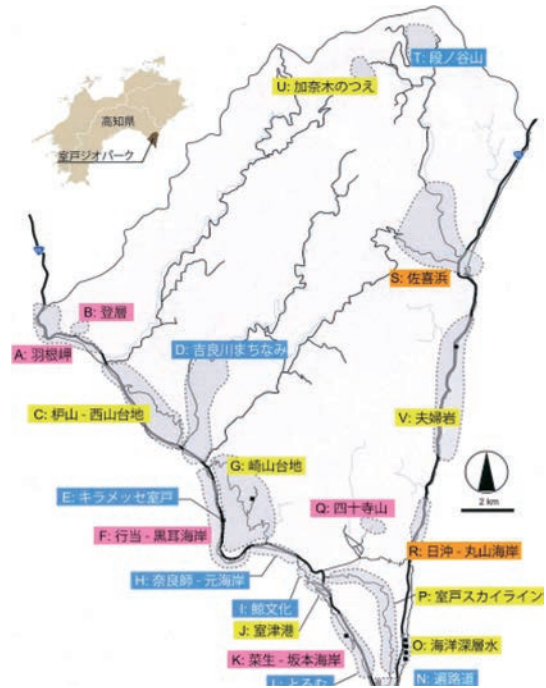


図1 室戸ジオパークの位置と平面図

### 3. 山陰海岸ジオパーク管理市町へのヒアリング

山陰海岸ジオパークを直接管理する地元自治体の担当者へヒアリングを行った。目的はマネジメントプラン策定時に設定した、①理念、②管理運営、③財源、④組織、⑤評価についての意見収集にある。調査日は2012年8月29日(水)～31日(金)、方法は中橋が役所に訪れ、担当者へインタビューをする方法を取り、結果を表1にまとめた。

### 4. ジオパークを活用した地球科学教育の普及とジオツーリズムによる地域振興 —レスボス島ジオパーク(ギリシャ)と山陰海岸ジオパークの事例—

ここでは、世界ジオパークとジオツーリズムについて概観した後、ジオパークを活用した地球科学教育の普及とジオツーリズムによる地域振興について、2004年GGN(Global Geoparks Network)発足とともに世界ジオパークへ加盟したギリシャのレスボス島ジオパークと山陰海岸ジオパークの事例を紹介する。

#### 4-1 ジオパークとジオツーリズム

ジオパークはジオ遺産(geoheritage)を保全保護しながら、地球科学教育の普及やジオツーリズムを通じた地域振興(regional promotion)に活用することで、持続可能な開発(sustainable development)を達成することを目的としている。ジオパークは一定の領域



表1 ヒアリング結果の比較一覧

	鳥取		兵庫
	鳥取市	岩美町	新温泉町
			
<b>①ジオパーク誘致のきっかけ</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新温泉町が山陰海岸国立公園の世界遺産登録を目指したが適わず、次策のジオパーク世界登録に賛同した。</li> <li>・平成19年山陰海岸国立公園をコリドーと捉え、ジオパークの考え方をまとめ提案。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成16年、但馬地域から地質公園の声が上がると、山陰海岸を世界遺産登録に申請したが却下され、次の一手として世界ジオパークへの登録が浮上し、それに岩美町も乗乗した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・但馬地域から美穂の浦などの地質資源を活かして地域振興の話があり、兵庫県が主導し、鳥取県が加わった。</li> <li>・大元を聞けば、豊岡の玄武洞の社長の発想と聞く。</li> <li>・財政的支援はゼロからのスタートであったが、学術的には神戸女子大学の波多先生の指導があった。</li> </ul>
<b>②エリアの特徴</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鳥取砂丘、湖山池、扇の山、摩臣山などが、海から山に広がるように立地する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6000年前の花崗岩の地形地質を見ることができ、兵庫県はどちらかというと火山岩が多く、やや褐色めいているが、浦富海岸は水成岩と異なり、色も淡い。</li> <li>・新規産業として、鳥取県産の食の事業に参加し、浦富海岸で獲れた海産物から新規商品を開発した。</li> <li>・そのなかに天然塩がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本海形成の過程が学習できる。遊覧船から節理などを間近に見ることが出来る。</li> </ul>
<b>③財源</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジオパークセンターでプログラムを検討している。砂粒の販売は好調で、ジオ物語などにも期待している。</li> <li>・プログラムを考案することにより、ジオパーク内の施設の自立に繋がる。例えば湖山池の情報プラザでは収益事業を検討している。物販・体験活動・教育旅行などが考えられる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・鳥取県からは330万円程度の補助、町の予算は1500万円程度である。</li> <li>・ジオツーリズム振興のためのガイド養成講座を開講し615人が参加、岩美ガイドクラブに20人登録。</li> <li>・ジオパークを活かして推奨品事業をスタートし、町民に対して、ジオパークを活用し、仕組みを求める。</li> <li>・新たに、「世界ジオパーク山陰海岸の海を満喫しよう、海の幸・ジオグルメとマリンスポーツ三昧、ダイビング・シーカヤック・スノーケル」モニターツアープロジェクトをスタートした。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・財源は新温泉町の単費と兵庫県の補助金による。</li> </ul>
<b>④管理運営プログラム</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市のジオパーク推進室が中心になるが、都市整備部に公園管理（湖山池公園）を、ジオパークセンター（自然公園財団）に鳥取砂丘の管理を委託している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的には観光客数と経済効果である。</li> <li>・ジオパーク認定後の岩美町の入れ込み客数の推移だが、平成18年には427372人とピークだったが、21年には312034人まで落ち込んだ。</li> <li>・ジオパーク認定後、22年には400636人、23年には412840人と回復しつつあり、ジオパーク認定の効果と言える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現在作成中である。地学をベースにして、小学校の理科、総合学習など、学校教育に落とし込む予定である。</li> <li>・新温泉町の観光課をマネジメントの中核拠点とし、ジオパーク館では常設展示を主体に運営している。</li> <li>・観光協会ではジオガイドワークをつくっている。各団体がそれぞれの地域を担当し活動している。</li> </ul>
<b>⑤組織</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普及啓発を最優先にしている。</li> <li>・砂丘管理のボランティアでは目標5000人としているが、平成23年度は6900人と増えている。ジオパーク登録の効果もあるのではないかと。</li> <li>・入れ込み客数については、ジオパークセンター、白兔海岸の遊覧船、湖山池などの拠点施設でデータを取っている。</li> <li>・商品開発にジオの名前を入れて販売することにより盛り上がる。</li> <li>・課題は農協、漁協などの関係機関の一体化の充実である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岩美町商工観光課、渚交流館を拠点に組織が形成されている。情報発信として町内の企業にジオパークの案内などを依頼している。例えばガソリンスタンドが案内所になっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光客数、施設数を評価する。</li> <li>・商工観光課の調べで数字は徐々に増えている。</li> </ul>
<b>⑥評価</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・観光政策のなかで「砂の美術館」を重視する。</li> <li>・「砂の美術館からジオツーリズム」を今後のキャッチフレーズとして取り上げて行く。</li> <li>・ジオパークは①保全（砂丘の保全ボランティア7000人）・②教育（学習支援）③ジオツーリズム（旅行、補助金）④産業振興（宿泊・補助金）とあるが、入り口がわかり辛い。</li> <li>・その点、砂の美術館はわかりやすい。ジオツーリズムと一体化することにより観光が誘発される。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特に定めていない。今後の課題でもある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ストーリーとしては、景観と地質に置く。</li> <li>・テーマとしては、「多様な地形・地質と風土のなかで人々が暮らす」のようなことを考えている。文化的な視点から捉えたい。</li> <li>・本来なら、12のエリアそれぞれにテーマを設定し、ストーリーをつくる必要がある。今後は、学術部会(三田村先生)を通して作成していかなければならない。</li> </ul>
<b>⑦理念</b>			
	兵庫		京都
	香美町	豊岡市	京丹後市
			
<b>①ジオパーク誘致のきっかけ</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・因田県境市長連絡協議会において、山陰海岸国立公園の世界遺産登録を目指したが適わず、世界ジオパークネットワークへの登録を目指すことが提案された。</li> <li>・香美町も人口が減少し、観光客の誘致政策は課題であったので、支持した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・山陰海岸を世界レベルの公園にするというジオパークの考え方に豊岡市も賛同した。</li> <li>・協議会が設置され豊岡市長が会長に就任し、兵庫県但馬県民局に事務局が設置された。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新温泉町でジオパークの取り組みの動きが始まり、山陰海岸国立公園の構成市として声掛けがあり、共同でジオパーク推進協議会を立ち上げ、その構成団体となった。</li> </ul>
<b>②エリアの特徴</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海と山にジオサイトがある。海では、今日では日本に生息しないソウ・サイの足跡化石があり、山には棚田、滝などの名勝地が広がる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海岸部から内陸部、そして山間部にかけてジオサイトが位置し、多様なジオが楽しめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小天橋、琴引浜と名の知れた景勝地を抱え、かねてより観光地として知られている。</li> </ul>
<b>③財源</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・財源は香美町の単費が2000万円、兵庫県の補助金が300万円程度である。ジオパークを催し参加費を徴収しているが収益事業まで至っていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊岡市、兵庫県の支援を受けて、年間事業費は5,900万円である。ただし、この金額には平成24年度の災害復旧費(3,000万円)が含まれている。</li> <li>・収益事業は特別に行っていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・24年度の年間予算は約2500万円である。</li> <li>・京都府からの支援は約200万円である。</li> <li>・ジオパークにおける行政の収益事業は行っていない。</li> <li>・基本的には地元企業などが経済活動を行い、行政はその仕組みづくりなどの支援を行うこととする。例えばジオパークは保護・活用を基本とするが、その逆発想の考案・サポートは行政の役目と考える。</li> </ul>
<b>④管理運営プログラム</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジオパークマスターの養成制度をスタートした。学術委員の指導を受けて、一定レベルに到達するとガイドに昇格するシステムとしている。</li> <li>・町内のお店に登り旗を立て、ジオパークマスターを募っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の資源を活かす。玄武洞では玄さんをマスコットにして商品開発を行っている。コウノトリも同様で、ストラップなどを開発し販売している。</li> <li>・ジオパークにからめて、ジオラーメン、溶岩ドーナツなどが開発された。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校の学習プログラムにジオパークを取り入れている。嵯峨山ガイド養成講座も開設した。</li> <li>・ジオトレッキング等を活用した民間によるモニタリングツアーなどの取り組みが進められている。</li> <li>・まずは市内向けのプログラムを充実し、現在は、協議会事業としてツアーを実施している。</li> </ul>
<b>⑤組織</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・商工課と同列に、香美町ジオパーク推進協議会（教育・企業）がある。</li> <li>・民間組織として、ジオパークのファンクラブがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・豊岡市観光課から各ジオサイトの管理は観光協会に委ねている。また市の支所があり、例えば玄武洞、神鋼、竹野海岸などは支所が管理を受け持っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・京丹後市ジオパークネットワーク推進会(市商工観光課・観光・教育)という市独自の組織を立ち上げている。</li> <li>・市にジオサイトがあり、それぞれに管理者がいる。例えば琴引浜鳴き砂を守る会など、組織別が情報交換をしている。</li> <li>・NPO全国まちづくりサポートセンターの丹後支所があり、観光ガイド養成などを担っている。現在ネイチャーガイドも実施している。</li> </ul>
<b>⑥評価</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今の状況では多くの観光客は見込めない。ジオパークに認定されることにより地域活性化が期待され、成功すれば観光客が来る。</li> <li>・若者の活躍を願って、ローカルヒーローなどをつくりつつある。商工課所も香美町の海産物を活かして、「香住岸」をつくり観光客を呼ぶ活動をしている。</li> <li>・このように、活性化策を評価し、それが進めば観光客も増え、経済効果も高まるという視点を持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入れ込み客数は一つの指標になる。玄武洞では21年度19,600人、22年度20,600人、23年度21,600人と増えている。ジオパーク認定の差響もあるが、玄さんの人気も大きい。</li> <li>・基本的には地域の人々の意識を評価する。すなわち地域の人々の自主的な行動が地域を活性化し盛り上げるから。</li> <li>・例えばガイド養成講座が開発された新たなガイドが増えている。これは地域活性化の源になり、地域の人々の向上心が養われる。これは間接的ではあるが、将来経済効果に結び</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・世界ジオパーク認定後の京丹後市における入れ込み客数の顕著な変化は把握できていない。ただし、鳴き砂文化館では22年度11,711人、23年度11,769人とほぼ横ばいである。</li> </ul>
<b>⑦理念</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ジオパークがまちづくりに結びつくような考えを持つ。まずは地元住民が世界ジオパークに認められ、その価値、魅力に目覚め、自らの考えを発信していかなければならない。</li> <li>・カニ、ウシなどの資源が豊かで、レクリエーション地も豊富で、いつも周辺から見られている、という意識を持たねばならない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いかにして地域を活性化させるか、行政の役目は地域を元気にする具体策をどのように考えるかにある。そのためには、地域の人々がジオパーク活用を考えなければならぬ。</li> <li>・地域に光を当て地域の力を引き出す。持続可能な発展を地域が行うことに本質がある。</li> </ul>	

(territory) をもち、行政の支援を受けながら、地域が主体となってボトムアップでその活動を推進することが望まれる。2013年2月現在、世界ジオパークネットワーク (Global Geoparks Network, 以下 GGN) へは世界27箇国、90地域が認定を受けており、日本では洞爺湖有珠山 (北海道)、糸魚川 (新潟)、山陰海岸 (京都・兵庫・鳥取)、室戸 (高知)、島原半島 (長崎) の5つのジオパークが GGN に加盟している。日本国内のジオパーク組織である日本ジオパークネットワークには2013年2月時点で GGN 加盟5地域を含む25地域が加盟している (図2)。今後、ジオパークを目指す地域も国内に17地域以上あり、国内でのジオパーク活動は広がりを見せている。

ジオツーリズムは、地球科学的観点から地球のダイナミズムやメカニズムについて自然景観や人文景観を読み解きながらたどる観光形態の一つである。そもそも「ジオ」という言葉は「土地・大地」を示すラテン語由来の接頭語であり、地球環境や空間を研究対象とする地球科学的なものの見方を示すものである。

このジオツーリズムが登場した背景には、1992年の「アジェンダ21」にも示されているように、自然環境を保護保全しながら持続可能な開発を達成することを国際社会が目指すようになったことが挙げられる。同年には生物多様性条約が成立し、生物圏に対する保護保全の国際的な枠組みやネットワークが形成される中、ジオ遺産に対する国際的な認識は必ずしも高いものではなかった。

1991年のジオ遺産の保護保全に関する国際会議で「地球の記憶 (the memory of Earth) 宣言 (ディーニュ宣言)」が出された。ここでは、岩石や景観に刻まれた「地球の記憶」を地球遺産 (earth heritage)、ジオ遺産 (geoheritage) として保全保護する必要性を主張した。そして、これらジオ遺産の保全保護と地球科学教育の普及、ジオツーリズムの振興を通じて地域の持続可能な開発を達成することを目的としたジオパークの活動へとつながっていくこととなる。

国際的な枠組みに基づき推進されるジオパークおよびジオツーリズムの概念は2000年代に入り本格的に導入された。その際、問題となったのが日本語訳である。というのも、通常、geology は地質学と訳されるが、この訳は狭義の地質学として理解されており、広義の地質学を想定させるものではなくなっていたためである。そこで、日本ジオパーク委員会からジオパークを「大地の公園」、geoheritage を「大地の遺産」とする訳語が提示された。

ジオツーリズムには二つの解釈が存在する。一つは、「地球科学的現象や自然景観に対する学習や理解、楽しみを目的とした観光形態 (geological tourism)」という狭義の解釈であり、もう一方は、「地球科学的観点に基づいた地域性 (the identity of a territory) の学習や理解、楽しみを目的とした観光形態 (geographical tourism)」という広義の解釈である。

ここで重要となるのが「地球科学的観点」である。自然景観をただ単に美しいものとして「見る」だけでは、ジオツーリズムとなりえない。その景観の成り立ちや特徴を科学的に理解することを楽しむ態度が重要となる。もちろん、ジオ遺産の保護保全の機運が高まる以前から、ジオツーリズムは「地学観光」、「自然散策」という形で存在していたが、それらはある一定程度の地学教育を受けた人を対象とした専門的な「地学巡検」や、他のツーリズムに付随して解説されるものという側面が強く、観光形態としてもニッチなものであった。

ジオパークの発展に伴い、ジオツーリズムは広く社会に働きかけるものとなり、地球科学を土台としながら、生物や文化といった他分野も取り込んでいくようになる。地球科学的観点から見た自然景観のあり方を認識しつつ、その上で繰り広げられる動植物の姿や人間の歴史・文化を取り入れることで自然科学および人文社会科学の統合を推進していく姿勢を見せているからである<sup>5)</sup>。また、1991年のディーニュ宣言において、地球の歴史と生命の歴史は不可分であるとしている。

2011年ポルトガルのアロウカジオパークでジオツーリズムに関する国際会議が開催された。そこで出されたアロウカ宣言では、ナショナルジオグラフィックソサエティのウェブサイトに掲載されている定義に基づき、ジオツ



図2 日本のジオパーク分布



リズムを「地域性 (the identity of a territory) を維持し、強化するツーリズムである。その場所の地質、環境、文化、美的価値、遺産と住民の福祉が考慮されるものであり、地学的観光は多様な要素の一つである」(新名訳) と定義している<sup>6)</sup>。この広義の解釈に対しては、ジオツーリズムの本質からかけ離れるという批判もある<sup>7)</sup>。

ジオツーリズムを導入した地域では、ビジターセンターや拠点施設、自然散策路の整備、ジオガイドの育成、案内看板や説明看板の設置、パンフレットやチラシ類の編集発行、ジオツアーの開催、新商品・サービス開発など、ハード・ソフト両面からジオツーリズムを推進している。各地のジオパークではジオガイドによるジオツアーが開催され、参加者は自然環境に対する理解を深めている。ジオツアーの形態も、徒歩によるもの、バスで周遊するもの、船に乗って行くものなどさまざまである。

ジオツーリズムの推進にあたって、ジオ遺産に関するインタープリテーションが重要となる。物言わぬジオ遺産のストーリーを構築し、ビジターの好奇心や感性を刺激するようなインタープリテーションを行うことが求められる。しかしながら、それは地球科学的な情報の一方的な伝達で達成されるものではない。ビジターが持つ知識や経験からジオ遺産への理解を深め、新たな発見を促し、ビジター自らの興味関心を広げるよう手助けすることがジオガイドの役割である(アロウカ宣言2011)。このようなジオガイドを育成するための養成講座が日本各地のジオパークで開催されており、大学や研究所に所属する研究者や博物館の学芸員、専門職員として雇用されているジオパークスタッフなどが講師としてガイド養成にあっている。

#### 4-2 レスボス島ジオパーク (ギリシャ) の事例

レスボス島は北エーゲ地方にある面積約1600km<sup>2</sup>の島であり、クレタ島、エヴィア島に次いでギリシャ第3位の面積をもつ島である<sup>8)</sup>(図3)。島全体の人口は約10万で、主要産業はオリーブ生産を中心とした農業である。島の南東部に位置するミティリニは島の中心都市であり、ミティリニ港やミティリニ国際空港が立地するゲートシティである。

レスボス島ジオパークは世界ジオパークネットワークが設立された2004年から、世界ジオパークのメンバーとして活動する地域である。2004年から2012年8月まで「レスボス石化林ジオパーク (Lesvos Petrified Forest Geopark)」として、島西部のシグリにある石化林公園、自然歴史博物館を中心とした地域がジオパークのテリトリーであったが、2012年9月から全島がジオパークとし



図3 ギリシャの世界ジオパーク (2013年)

て再編された。

ミティリニから西へ90km離れた石化林公園では2000万年前、エーゲ海北部の火山噴火によって、セコイアや松の木が火山灰に埋もれ、長い年月をかけた化石となった石化林が現場保存、展示されている。また、一部はフェンスで囲われた保護区となっており、その入り口には世界ジオパークの認定書のレプリカが看板として設置されていた。それぞれの珪化木に説明看板はなく、その代り数字を書いた杭がある。この数字は有料のガイドブックと対応しており、ビジターはガイドブックを片手に周遊することができるようになっている。

1994年に設立された自然歴史博物館では、石化林の形成プロセスや自然史、歴史に関する展示のみならず、珪花木の発掘を行う“The little paleontology”、石化林の形成プロセスを学習する“the adventures of Dinouli in the sequoia forest”など、約20種類の教育プログラムを用意しており、国内外の学校や団体が利用している<sup>9)</sup>。地震に関する学習プログラムでは、ギリシャも日本と同様に地震と火山の国であり、プレートを理解することがギリシャを理解することにもつながるとしている。ギリシャで発生した過去の地震についてのパネル展示、地震の発生メカニズムを学習するためにジャンプして揺れを起こす実験、地震を疑似体験できる装置などが博物館内に用意されている。また地震を疑似体験できる装置では、ギリシャで発生した地震だけでなく、日本で発生した巨大地震(1995年の兵庫県南部地震)も体験することができる。

東西での経済格差を抱えていたレスボス島では、シグリに自然歴史博物館および石化林公園が整備されたことにより、観光客が増加し、宿泊施設や飲食店、小売店が約400店舗、新規に立地した。Woman's cooperativeという女性団体もジオパーク活動に参加するようになり、

地元の伝統的な家庭料理を提供している。また、ジオパーク以降、ジオパークとしてのプロモーションも積極的に行い、経済的成功を収めつつある。

さらに、2012年9月、レスボス島は西部から全島へとジオパークのエリアを拡大した。これにより青銅時代のテルミ遺跡、イオニア式の神殿跡や220か所の礼拝所が周辺に位置するリモノス修道院、ギリシャで最も温度の高いポリクニトスの温泉など、島全域の自然と文化、歴史がジオパークの対象となり、島全域での経済的成功を目指している。

レスボス島ジオパークは自然歴史博物館、エーゲ大学、行政、地域住民によって運営されている。その中で、大学が果たす役割は非常に大きい。エーゲ大学では世界各国のジオパークスタッフや大学院生を対象としたサマースクールを開催している。約2週間にわたって行われる集中講義では、ヨーロッパ各地から講師を招き、ジオパークの最新トピックについて議論する。2012年度の参加者はスペイン、ポルトガル、ハンガリー、ギリシャ、イラン、トルコ、中国、日本から13名が参加した。

ジオパークはネットワークでもあるため、多様な地域との情報共有や議論を重ねることにより、ネットワーク活動自体を活発にしていく必要がある。その議論の場として定期的に開催される国際会議のほかに、このようなサマースクールが開催されていることは、ジオパークのマネジメントを考えるうえで、世界と考え方をシェアする好機となっているであろう。また、自然歴史博物館で行われている地震のプログラムで他国の地震災害が紹介されているケースも見られるように、特定の地域だけでなく広く地球上で発生するイベントや地球のメカニズムを学習するために、その経験やノウハウ、ツールをジオパークのネットワークを活用して、共有する機会が増えることが望まれる。

#### 4-3 山陰海岸ジオパークの事例

山陰海岸ジオパークでは、地域組織・施設ごとに活動しており、それぞれが様々な取組を行っている。ここでは、岩美町と湖山池での取り組みについて概観する。

岩美町におけるジオパークを活用した地域振興では、ジオツーリズムの導入により商品やサービスの多様化が図られている。例えば、岩美町ではダイビングショップの開店(2010年)、遊覧船事業者による小型船の導入(2010年)、体験型観光サービスの充実、地域独自のジオパーク商品の認証制度などが行われている。

山陰海岸を代表するガイド団体であるいわみガイドクラブが行うジオツアーでは、海岸部の地形地質、海中生

物、植物の観察に加え、歴史・文化的サイトである岩井温泉、荒金鉾山、銀山といった内陸部への広がりが見られ、地学観光(geological tourism)から地理的観光(geographical tourism)へと展開してきている。

山陰海岸ジオパーク西部に位置する湖山池では、南岸の青島大橋入口にある湖山池情報プラザがジオパークの拠点施設となっている。この建物は周辺住民向けの多目的ホールであったが、スタッフは常駐しておらず、長らく使われていなかった。そこで、地元代表者が鳥取市からの委託管理をうけ、2010年5月に「湖山池情報プラザ」として開所した。ここにはアドバイザーとスタッフの2名が常駐しており、ブログを使った湖山池の情報発信、ウォーキング大会やジオカフェ、体験教室などのイベント開催、施設管理、展示パネルや展示品の製作等を行っている。

湖山池では、ジオパーク認定以前から、環境学習に力を入れていた。というのも、昭和40年代から40年以上、水質浄化運動が展開されている地域であり、周辺の小学校では湖山池の葦を使った卒業証書作りを行うことで、湖山池の環境学習を進めている。

また、湖山池周辺には数百もの遺跡が眠っており、古代から人々の暮らしの場であったことを物語っている。中世にはいと、日本海の内湾として天神山城の交易を支え、湖山砂丘と末恒砂丘の発達によって潟湖となると石がま漁が発達した。湖山砂丘では船越家3代100年に渡る砂との戦いの末、湖山砂丘の開拓に成功し、砂丘農業が発達した。昭和初期には城崎から水上飛行機が飛来し、山陰の空飛ぶタクシーとして活躍した。昭和30年代、湖山池は生活と共にある池であった。子供たちは年長者から池で泳ぎ方を習い、魚釣りをして楽しんだ。

鳥取大火をきっかけに湖山砂丘では都市化が急速に進展した<sup>10)</sup>。昭和38(1963)年に流入する海水の調整を行うため水門が設置され、昭和58年には洪水対策として千代川河口付け替え工事が行われた。昭和40年代に入ると、周辺からの各種排水の流入等が相まって水質汚濁が問題となった。

この水質浄化に向けた取り組みが40年以上行われてきた中で、2012年3月の水門開放に至り、その結果、鳥取県特定希少野生動植物に指定されているカラスガイは絶滅した一方で、最近ではアザラシの「コヤちゃん(コヤマみどり)」の登場によって注目が集まり、ビクター数も増加することとなった。

これまでは湖山池の成り立ちや人々との暮らしを中心としたストーリーを作成し、ジオパークで提供してきたが、水門開放によって急変した自然環境に対する理解を促す環境学習の機会提供や、現在進行している環境変化

に対する情報発信することが必要となる。また、ジオパークとして、地球科学だけでなく多様な学問分野とのネットワークを構築し、議論する必要がある。湖山地を対象とした調査研究は数多くあるが、それぞれの研究成果を共有する機会は少ない。

「持続可能な開発」の実現をめざし、各分野で蓄積された研究成果とその課題や哲学を、研究者、地域、行政と共有するプラットフォームの形成に寄与できる可能性がジオパークにはあると考える。

## 5. 山陰海岸ジオパークにおける文化施設に関する一考察—利活用の方法をめぐって—

### 5-1 はじめに

筆者のような建築学や建設業に関わる者がジオパークを語ることは難しい。それは地質学や地理学に関する知識が決定的に不足しているという点と建設がジオ（大地）に対して破壊的な行為であると受け止められやすい点による。前者については否定の余地がないが、後者については弁明させて欲しい。「大地（地球）」を建築設計の鍵としている者は少なくない。建築設計に携わる者の多くは、様々な素材や場所に大地の産出を感じ、自覚的にそれにあらがい、また順応する。近代建築の父祖とされるウィリアム・モリスは「大地の公平性」という鍵語をもって、芸術作品と自然作品が遷移的に創り出される場として「大地」のかけがえのなさを説いているし<sup>11)</sup>、「芸術作品の起源」や「建てる、住まう、考える」などの論考によって建築家に影響を与え続けている哲学者ハイデッガーも「大地」に着目し、その本質を「自分を閉鎖するもの」とし、芸術作品によってひとつの世界が開かれることでその基底にある混沌とした大地が大地として見えてくるという事態を解き明かしている<sup>12)</sup>。21世紀に入ってエコロジカルな建築が求められているが、その実現には単に環境負荷を数値的に解決するだけでは不十分であり、設計者や施工者が地球環境の一部を構成しているのだという分別をもつと同時に使用者や訪問者に対してそのことを知らしめる必要がある。芸術作品や建築作品が担う大きな役割のひとつは「大地への眼差し」を開かせることである、このことをはじめに強調しておきたい。

山陰海岸ジオパークの風致景観を活かした集客性の高い文化施設を実現するにはどのような方策があるか、これに答えるのが筆者に与えられた課題である。例えば、広島8大学卒業設計展2013において優秀賞を獲得した「砂丘の境界」という作品は鳥取砂丘の緑化防止と観光地における魅力的建築の創出とを目論んで、うねりながら起伏するガラスチューブという斬新なアイデアを提案

しており、実現されれば集客が見込める一大スポットとなるだろう。このように建築の形態、材料、構造、設備等に注目して新たな建築を設計・提案することも可能であるが、本稿では現在すでに建っている施設の利活用の方法を検討したい。まず、3府県にまたがる地域に存する諸施設について整理する。次に、それらの中から建築空間計画および展示内容について示唆深い事例を紹介する。最後に、文化施設という枠組みを超えて、山陰海岸ジオパークにおける文化の担い手について考察する。

### 5-2 山陰海岸ジオパークにおける既存文化施設

鳥取県東部（鳥取市・岩美町）、兵庫県北部（新温泉町・香美町・豊岡市）、京都府北部（京丹後市）に存する文化施設、とりわけ博物館・資料館・情報館について、所在地、カテゴリ、事業主体、管理運営組織等を表にまとめる（表2）。作成にあたって、神戸新聞但馬総局編『山陰海岸ジオパーク』<sup>13)</sup>、山陰海岸ジオパーク推進協議会および兵庫県立大学自然・環境科学研究所ジオ環境研究部門制作「山陰海岸ジオパークまるごと体感マップ」、但馬地域博物館連絡会制作「山陰海岸ジオパークと但馬のミュージアム」、豊岡市役所観光課制作「豊岡市観光ガイドマップ」、京丹後市ホームページ（URL：2013年10月9日現在）（<http://www.city.kyotango.kyoto.jp/>）を参考にした。カテゴリに関して、博物館については日本博物館協会の分類にならい、「総合」「郷土」「美術」「歴史」「自然史」「理工」「動物園」「水族館」「植物園」「動水植」から選択する。資料館についても展示資料内容から博物館と同様の分類法を用いる。情報館については「情報」という分類とする。また、文化財登録されているなど、建築的価値がとくに認められるものについて、備考欄に特記する。

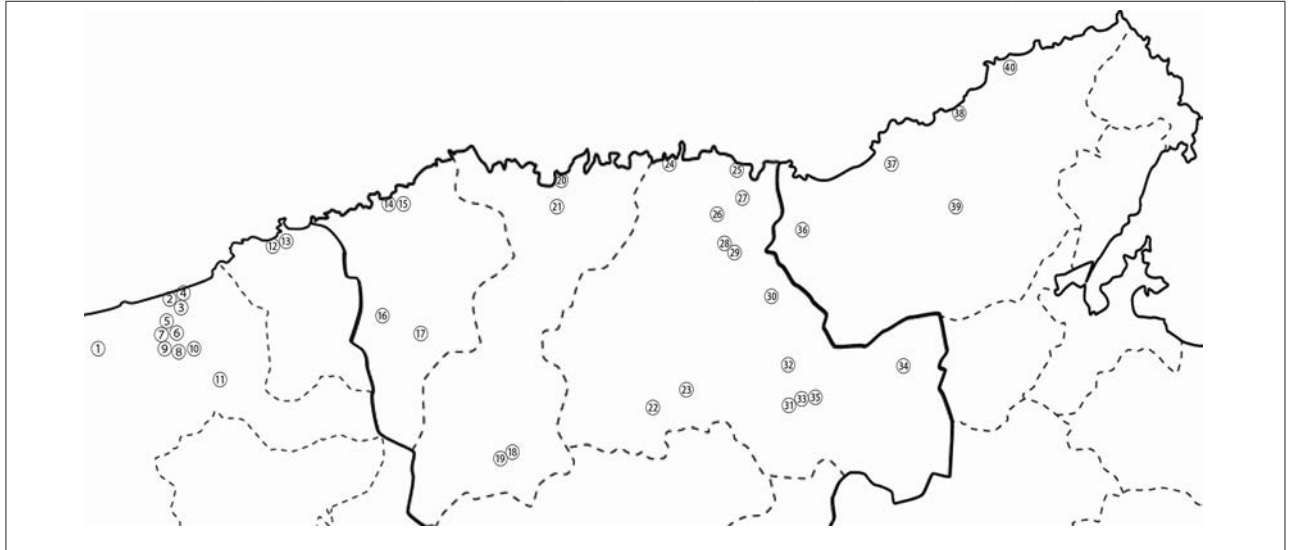
### 5-3 事例の検討

#### (1) 建築空間計画について（プランニング）

ジオパーク関連施設に限らず、不特定多数の人々が利用する空間に同一の経験を求めるのであれば、ユニバーサルデザインの発想が求められることは自明であろう。これは段差を解消する、死角空間をつくらない、など建築のハード面に特化したものではなく、サイン計画にも当てはまる。山陰海岸ジオパークは世界ジオパークとして認定されているという性格上、世界各国からの訪問者を想定したサイン計画がなされていることが望ましい。その好例として「⑬山陰海岸学習館」は、1981年に山陰海岸自然科学館として設立、2010年に山陰海岸ジオパークの拠点施設として再生した。その際、世界ジオパーク



表2 山陰海岸ジオパークにおける既存文化施設一覧（博物館・資料館・情報館）



No.	施設名称	所在地	カテゴリ	事業主体	管理運営組織	備考
①	湖山池情報プラザ	鳥取市高住	情報	鳥取県	東部総合事務所生活環境局	
②	鳥取砂丘ジオパークセンター	鳥取市福部町湯山	自然史	鳥取県	生活環境部砂丘事務所	
③	鳥取砂丘砂の美術館	鳥取市福部町湯山	美術	鳥取市	経済観光部鳥取砂丘・ジオパーク推進室	
④	砂丘センター	鳥取市福部町湯山	情報	日本交通株式会社	砂丘センター	
⑤	渡辺美術館	鳥取市覚寺堤下	美術	公益財団法人渡辺美術館	公益財団法人渡辺美術館	
⑥	鳥取県立博物館	鳥取市東町	総合	鳥取県	鳥取県教育委員会	とっどりの県民の建物100選日建設計
⑦	わらべ館	鳥取市西町	歴史	鳥取市	財団法人鳥取童謡・おもちゃ館	とっどりの県民の建物100選山本浩三・都市建築研究所
⑧	鳥取市子ども科学館	鳥取市吉方温泉	理工	鳥取市	財団法人鳥取市教育福祉振興会	
⑨	鳥取民藝美術館	鳥取市栄町	歴史	財団法人鳥取民藝美術館	財団法人鳥取民藝美術館	国登録有形文化財
⑩	鳥取市歴史博物館「やまびこ館」	鳥取市上町	歴史	鳥取市	財団法人鳥取市文化財団	
⑪	因幡万葉歴史館	鳥取市国府町町屋	歴史	鳥取市	財団法人鳥取市文化財団	とっどりの県民の建物100選山本浩三・都市建築研究所
⑫	岩美町立渚交流館	岩美町牧谷	自然史	岩美町	岩美町立渚交流館事務局	
⑬	山陰海岸学習館	岩美町牧谷	自然史	鳥取県	鳥取県教育委員会	
⑭	新温泉町山陰海岸ジオパーク館	新温泉町芦屋水尻	自然史	新温泉町	商工観光課	
⑮	新温泉町浜坂先人記念館以命亭	新温泉町浜坂	歴史	新温泉町	新温泉町教育委員会	
⑯	おもしろ昆虫化石館	新温泉町千谷	自然史	新温泉町	新温泉町教育委員会	
⑰	兵庫県立但馬牧場公園	新温泉町丹土	動水植	兵庫県	新温泉町	
⑱	兵庫県木の殿堂	香美町村岡区和池	歴史・自然史	兵庫県	香美町	安藤忠雄建築研究所大断面構造用スギ集成材
⑲	但馬高原植物園	香美町村岡区和池	植物園	香美町	株式会社むらおか振興公社	
⑳	香美町海の文化館	香美町香住区境	自然史	香美町	観光商工課	
㉑	大乘寺円山派古画展覧場	香美町香住区森	美術	大乘寺	大乘寺	
㉒	植村直己冒険館	豊岡市日高町伊府	歴史・自然史	豊岡市	豊岡市教育委員会	日本建築学会賞 公共建築100選栗生明+栗生総合計画事務所
㉓	但馬国府・国分寺館	豊岡市日高町祢布	歴史	豊岡市	豊岡市教育委員会	
㉔	竹野スノーケルセンター	豊岡市竹野町切浜	自然史	環境省	竹野スノーケルセンター運営協議会	
㉕	城崎マリワールド	豊岡市瀬戸	水族館	日和山観光株式会社	城崎マリワールド	
㉖	城崎文芸館	豊岡市城崎町湯島	歴史	城崎温泉観光協会	城崎温泉観光協会	
㉗	兵庫県立円山川公園美術館	豊岡市小島	美術	兵庫県	兵庫県体育協会グループ	
㉘	玄武洞ミュージアム	豊岡市赤石	歴史・自然史	公益財団法人玄武洞ミュージアム	公益財団法人玄武洞ミュージアム	
㉙	玄武洞公園案内所	豊岡市赤石	情報	豊岡観光協会	豊岡観光協会	
㉚	豊岡市立コウノトリ文化館	豊岡市祥雲寺	自然史	豊岡市	豊岡市コウノトリ共生部	
㉛	伊藤清永美術館	豊岡市出石町内町	美術	豊岡市	豊岡市教育委員会	豊岡市出石伝統的建造物群保存地区宮脇榎建築研究室
㉜	いざし古代学習館	豊岡市出石町袴狭	歴史	豊岡市	豊岡市教育委員会	
㉝	出石史料館	豊岡市出石町宵田	歴史	豊岡市	豊岡市教育委員会出石分室	兵庫県住宅百選 豊岡市指定文化財近代和風建築
㉞	日本・モンゴル民族博物館	豊岡市但東町中山	歴史	豊岡市	豊岡市教育委員会	
㉟	出石明治館	豊岡市出石町魚屋	歴史	豊岡市	豊岡市教育委員会出石分室	豊岡市指定文化財木造擬洋風建築
㊱	豪商稲葉本家	京丹後市久美浜町	歴史	京丹後市	特定非営利活動法人わくわくする久美浜をつくる会	国登録有形文化財
㊲	網野郷土資料館	京丹後市網野町木津	郷土	京丹後市	京丹後市教育委員会	
㊳	琴引浜鳴き砂文化館	京丹後市網野町掛津	自然史	公益財団法人日本ナショナルトラスト	京丹後市教育委員会	連合設計社市谷建築事務所吉田桂二設計
㊴	丹後震災記念館	京丹後市峰山町室	歴史・自然史	京丹後市	京丹後市	近代日本の名建築 京都府指定文化財 一井九平設計
㊵	京丹後市立丹後古代の里資料館	京丹後市丹後町宮	歴史	京丹後市	京丹後市教育委員会	

として機能するべく館内の展示説明には日本語と英語を並置させた。一部には中国語と韓国語の表記も用い、パンフレットについてはロシア語と台湾語も用意されている。このような配慮は、この施設が鳥取県立博物館の付属施設であり、展示方法に関して確かな経験と知識を有していることによると言える。山陰海岸ジオパークにおける施設の多くで、手描きのポスター（日本語）が貼り付けられた壁面や可動間仕切りが見られた。もちろん経済的事由もあるだろうが、山陰海岸学習館をひとつの水準として山陰海岸ジオパーク全体として展示方法に統一性をもたせるとよいのではないだろうか。

建築空間それ自体が展示物と密接に関わる事例として、「⑱兵庫県木の殿堂」と「㉒植村直己冒険館」が挙げられる。ともに1994年に竣工している。木の殿堂は安藤忠雄設計によって香美町村岡の山中に開館した。森や木の生活文化を再認識させることを目的として世界の民家模型や世界中の大工道具や民具が展示されるとともに、ドーナツ型平面をした展示棟の建築表現に特徴をもたせている。外観に使用される横張りの杉板、内部空間におけるスギ集成材による大断面の柱と梁が訪問者を圧倒し、木と建築との関わりを否応なく実感させる。植村直己冒険館は栗生明設計により植村直己の出身地である豊岡市日高町に鉄筋コンクリート造によって建てられた。半地下に展示空間を設けることにより、地形を保存することが図られている。二枚の壁が主動線として貫入されており、それは設計者によれば大地を切り裂くクレバスをイメージしたものだという。来館者に冒険家植村直己の地の果てまでも踏破しようとする意志を伝えることが企図されている。木の殿堂は大地に育つ森や木を生活に活かす意味や方法を、植村直己冒険館は人間が大地において生きることの意義を考えさせるものとして、冒頭で述べた「大地への眼差し」を鍛える教育的効果をもった施設であると言える。竣工後20年近く経った今でも遜色なく使用されている点も評価できる。また、両施設とも山陰海岸ジオパークのエリアにありながらも山側に建つためジオパーク関連の施設に数えられない可能性があるが、「大地とくらし」というくくりによって捉えれば、非常に価値がある。ただ、木の殿堂は、展示室、森の中を散策するブリッジ、展望室（屋上は展望台）によって構成されているが、展望室がほとんど使用されていない。この空間を「森のジオパーク」あるいは「山のジオパーク」の一拠点として再整備するとよいと思われる。

## (2) 環境学習施設の展示内容について（コンテンツ）

前節で取り上げた木の殿堂と植村直己冒険館も該当す

るが、表中のカテゴリが「歴史・自然史」となっているものをジオパークにおける文化施設の方向性として定めたい。野・山・海といった自然そのものを知るだけでなく、農山漁村、農漁漁具、民芸品などを通して自然の中で人間がどのような生活を営んできたのかを知り、これからの生活を切実に考えるきっかけを与えること、こうした機能が環境学習施設に求められてよいだろう。地質資源やサイトの成り立ちを学ぶことができる自然史系博物館には地上で生成・変容してきた人間生活の足跡を学ぶことができる人文系の内容を、現在人文系博物館として運営しているものには自然に関する内容を付加することで、環境への理解が深まると思われる。

具体的方策を考えるために、事例「㉘玄武洞ミュージアム」について紹介したい。豊岡市赤石円山川東岸に存する玄武洞は国指定天然記念物であり、その壮大な断崖やそこに見られる柱状節理や板状節理に感動させられる。訪問者は玄武洞や他の4つの洞窟をめぐった後、駐車場の位置も影響し、玄武洞ミュージアムに自然に足を運ぶ。玄武洞ミュージアムは、1階：レストラン・土産コーナー、2階：石のミュージアム、3階：豊岡杞柳細工ミュージアムから成る。石のミュージアムでは玄武洞が石と縁が深いことにちなんで岩石や宝石が展示されている。豊岡杞柳（きりゅう）細工ミュージアムでは玄武洞付近を流れる円山川が生み出した湿地と肥沃な土を利用して栽培されたコリヤナギを原材料として編まれた杞柳細工の歴史、工具、作品を知ることができる。このように自然史系と歴史系の博物館が併設されていることは大変評価できる。しかし、利用状況に問題がある。おそらくふたつのミュージアムへの入館が有料であることや入口動線が雑多であることなどが要因となり、観光客は1階の土産コーナーで満足してしまうのである。観光客に対して入館料の支払いをためらわない風潮を求めるよりほかに方策はないようにも思われるが、博物や民芸品に関する理解を深めてもらうために一部の展示物を1階で無料展示するとよいだろう。その際、広域的に豊岡周辺をとらえ、現在も杞柳細工を製作している工房を紹介するなどして欲しい。これは山陰海岸ジオパーク推進協議会など行政の役割であろう。

今、杞柳細工に触れたが、山陰海岸ジオパークには種々の民芸品が豊かに残っている。これらは「大地とくらし」を学ぶことのできる格好の材料である。具体例を「民藝」という言葉の名付け親である柳宗悦の著書『手仕事の日本』<sup>14)</sup>から紹介しておこう。柳はこの著書において、「気候風土を離れて、品物は決して生まれては来ない」という確信のもと、日本各地で再発見した手仕事につい



て述べている<sup>15)</sup>。柳は伝統文化の根付く範囲を意識して令制国ごとに案内しており、山陰海岸ジオパークの範囲に相当するのは、因幡、但馬、丹後の箇所である。そこで取り上げられている品物を列挙すれば、因幡：因久窯、牛戸窯、向日安の手紡手織木綿、因幡紙、但馬：但馬牛、柳行李、丹後：丹後縞、丹後紬、丹後縮緬である。柳行李（やなぎごおり、杞柳細工）に関する「自然は編むためによい材料を与えてくれたと思います。そして祖先たちはよい技術をこの町の人々に授けてくれたと思います。」という文章に柳の自然と文化の両者を洞察する態度が端的に示されている。柳が示した品物のうち、向日安の木綿は現代では見られなくなったが、他のものは残っている。「⑨鳥取民藝美術館」「⑩兵庫県立但馬牧場公園」「⑪玄武洞ミュージアム」や山陰海岸ジオパークの範囲からは若干外れるが「あおや和紙工房（鳥取市青谷）」「丹後ちりめん歴史館（与謝野町岩屋）」などを通じてそれぞれの品物の価値を学ぶとともに、実際に工房を訪れ職人と直にふれ合えるようなジオツーリズムの仕組みが期待される。一方で、地域の経済活動への波及を考えると、岩美町で2011年に行われた「岩美芸術祭」や翌年の「岩美現代美術展」、2012年に鳥取市の中心市街地で試みられた飲食（街歩き）と民芸の連携イベント「とっとり今食×うつわ2012」などに見るよう、それぞれの工房やジャンルを超えた訴求力の大きい企画も求められる。

#### 5-4 山陰海岸ジオパークの文化の担い手

ジオパークを環境学習の場としてより良いものにするためには、本稿で取り上げた博物館・資料館・情報館のほか、市民会館、学校、リクリエーション施設、要所に点在する道の駅、商店などを幅広く活用し、地域ごとに持続的な企画が展開される体制が組み立てられなければならない。その際、外から人々を集めることも看過できないが、何よりもまず地域の人々の理解・参加・協力が重要である。各々の土地でくらす人々が、作り手、運び手、売り手、説き手、聞き手などとして積極的に関わってこそ地域の特質が現れるであろう。各地域に根差した文化の担い手、言い換えれば「内からの地域人」が必要なのである。その代表格として鳥取民芸運動を主導した吉田璋也がいる。吉田は医師でありながら、鳥取に関わるものを学ぶ限り学び、伝える限り伝えた。民芸を再発見してまわったのみならず、古建築物の保護、鳥取砂丘や湖山池の自然美の回復を唱えることもした。その人生は「内からの地域人」のあり方を示すものとして意義深い。吉田の功績については鳥取民藝協会編『吉田璋也

一民芸のプロデューサー』<sup>16)</sup>に詳しいので参考にされたい。

一方で、先に挙げた柳宗悦は日本全国の品物を体系的に整理した「外からの地域人」である。いわばプロフェッショナルな観光客である。単に観覧するような態度で各地域をまわるのではなく、様々な成り立ちや繋がりに対して関心をもって見物し、場合によっては積極的に全国に発信していく、そのような文化の担い手である。小説家もその一人であると言えよう。ある地域、ある時代の風物に関する正確な筆致はときに歴史記録として利用することも可能である。山陰海岸を考える上では志賀直哉を押さえておきたい。『城の崎にて』<sup>17)</sup>に描出される風景、『暗夜行路』<sup>18)</sup>の白眉とされる大山の場面、そこに辿りつくまでの城崎、香住、鳥取などの描写は地域固有の特質を伝えるものとしても価値が高い。例えば志賀は『暗夜行路』の中で湖山長者伝説にふれ「低い山と山との間の如何にも耕地として適わしい広い場所が、一面の水をたたえている様は、出水の田圃と見れば見られる眺めだった」と表現している。他にも志賀がその場所から離れて20年以上経ってから描いた情景もあるが、はじめて見たときの感動がはっきりと伝わる。大地での出来事を直に見る眼をもっていなければこのような表現は不可能であろう。すべての観光客に柳や志賀のような態度を求めてはならないのかもしれないが、受動的観光から能動的観光へという指針を提案したい。各人が興味に従って気ままに企画したツアーの下支えとしてジオパーク関連施設が機能するような観光のあり方を期待する。例えば、志賀の小説を片手にかれが見た風景を追体験するのもそのひとつだろう。

#### 5-5 おわりに

本稿では、「大地への眼差し」は人為のない自然だけではなく、地域の人々のくらしにも向けられるものであるという観点から「歴史・自然史」という融合的な文化施設のあり方と箱物が機能する前段階としての「地域人」の育成の必要性を提示した。「ジオパーク」という言葉だけがひとり歩きすることなく、様々な発見と伝承を促す生きた場が形成されることが望まれる。吉田、柳、志賀を含め山陰海岸ジオパークの各エリアゆかりの先人とその事績を辿り整理することができると思われるが、これについては今後の課題とする。

### 6. 山陰海岸ジオパークマネジメントプラン策定におけるエコツーリズムの検討

本報告では、山陰海岸ジオパークにおけるエコツーリズムの振興に必要な施設のうち、とくに自然歩道（トレ

イル)について検討した。

### 6-1 山陰海岸ジオパークの自然歩道の現状

山陰海岸ジオパークの歩道は、大まかに海岸歩道と内陸歩道に分けることができる。同ジオパーク内の自然歩道の一覧を表3に示した。

#### (1) 海岸歩道

海岸歩道は文字通り海岸沿いに歩く道であるが、主にリアス式海岸部分につくられている。砂浜については砂浜伝いに歩くことはできるがとくに歩道として整備されていない箇所が多い。表3を見ると、海岸歩道は短距離のものがほとんどであり、連続性に乏しい。海岸歩道はそのほとんどが山陰海岸国立公園区域内に位置する。2013年で指定50周年を迎える国立公園であるにもかかわらずその主な利用施設である歩道は未だ貧弱である。

#### (2) 内陸歩道

内陸歩道は、地形からは、平地・丘陵地を歩く歩道、山地を歩く歩道(登山道)に大別される。海岸歩道が海岸沿いに東西方向に延びるものが多いのに対して、内陸歩道は南北方向または北西—南東、北東—南西といった方向に延びるものがほとんどである。これは中国山地の支脈が山陰海岸へ向かって尾根と谷を伸ばしており、登山道がそれに沿っていることによる。

内陸歩道も海岸歩道同様、連続性に乏しい。例えば扇ノ山から赤倉山を経て鉢伏山に至る中国山地の脊梁部

は、扇ノ山・赤倉山間には歩道がなく、東因幡林道を歩く以外には道がない。また、雨滝から河合谷高原に至る中国自然歩道のように渓谷沿いの魅力的なルートにもかかわらず崩落のために長年通行止めのままの歩道もある。「歩道」とされていながら、実際には車道歩きをせざるをえないルートもある。湖山池南岸の良田～松原間は中国自然歩道の一部とされているにもかかわらず路側歩道すらなく、車両交通量も多いことから危険である。これは実質的には自然歩道とは言い難い。

### 6-2 他地域等における自然歩道整備の動向

#### (1) 環境省による長距離自然歩道の整備

我が国における長距離歩道整備は、環境庁の補助金による昭和45(1970)年の東海自然歩道にはじまり、その後、全国の各地方ブロック名を冠した長距離自然歩道が整備された。鳥取県では中国自然歩道が昭和52(1977)年～昭和57(1982)年にかけて<sup>19)</sup>、兵庫県及び京都府では近畿自然歩道が平成9(1997)年～平成15(2003)年にかけて<sup>20)</sup>整備された。

しかし、これらの整備は山陰海岸ジオパークの登録以前であり、もちろんジオパークを意識したものではない。ジオパーク登録後は、その区域内で長距離歩道にジオパークのサインが整備されたが、新たな歩道の整備はほとんど行われていない。

一方、同じリアス式海岸という地勢を有する三陸海岸では「三陸復興国立公園」の整備に合わせて長距離自然歩道「みちのく潮風トレイル(東北海岸トレイル)」が

表3 山陰海岸ジオパーク自然歩道一覧表

種別	名称	起点	終点	自然歩道	保護地域等	府県名	市町村名
海岸歩道	砂丘の道	浜坂	福部町湯山	中国	山陰海岸国立公園	鳥取県	鳥取市
海岸歩道	二上山城跡への道A	福部町岩戸	網代漁港	中国	山陰海岸国立公園	鳥取県	鳥取市 岩美町
海岸歩道		山陰海岸自然習館	羽尾鼻	近畿	山陰海岸国立公園	鳥取県	岩美町
海岸歩道	浜坂文学めぐりのみち	浜坂	諸寄	近畿	山陰海岸国立公園	兵庫県	新温泉町
海岸歩道		清富	鬼門塔		山陰海岸国立公園	兵庫県	新温泉町
海岸歩道	但馬御火浦漁火のみち	余部駅	三尾	近畿	山陰海岸国立公園	兵庫県	香美町
海岸歩道	但馬今子浦ユウスゲの道	柴山駅	今子バス停	近畿	山陰海岸国立公園	兵庫県	香美町
海岸歩道	猫崎半島をめぐるみち	竹野港	猫岬	近畿	山陰海岸国立公園	兵庫県	豊岡市
海岸歩道		田結	田結		山陰海岸国立公園	兵庫県	豊岡市
海岸歩道		大向	大向		山陰海岸国立公園	京都府	京丹後市
海岸歩道		網野町塩江	五色浜		山陰海岸国立公園	京都府	京丹後市
内陸歩道	水辺の道	吉岡温泉	布勢	中国	湖山池公園	鳥取県	鳥取市
内陸歩道	二上山城跡への道B	岩常	二上山	中国	なし	鳥取県	岩美町
内陸歩道	森林浴と小鳥のみち	上町	久松山	中国	久松山自然休養林	鳥取県	鳥取市
内陸歩道	雨滝のみち	雨滝	河合谷高原	中国	氷ノ山後山那岐山国定公園	鳥取県	鳥取市
内陸歩道	扇ノ山への道	八頭町姫路	若桜町諸鹿	中国	氷ノ山後山那岐山国定公園	鳥取県	八頭町 若桜町
内陸歩道	稲葉山へのみち	国府町町屋	稲葉山	中国	なし	鳥取県	鳥取市
内陸歩道	山陰道蒲生峠越	山の神	蒲生峠		なし	鳥取県	岩美町
内陸歩道		海上	上山高原		氷ノ山後山那岐山国定公園	兵庫県	新温泉町
内陸歩道		海上	霧滝		氷ノ山後山那岐山国定公園	兵庫県	新温泉町
内陸歩道		水の越	鉢伏山		氷ノ山後山那岐山国定公園	兵庫県	鳥取市
内陸歩道	城崎周辺円山川展望のみち	城崎温泉駅	城崎温泉駅	近畿	山陰海岸国立公園	兵庫県	豊岡市
内陸歩道	郷楽々浦と玄武洞をめぐるみち	城崎温泉駅	赤石バス停	近畿	山陰海岸国立公園	兵庫県	豊岡市
内陸歩道	円山川水面に沿って歩くみち	赤石バス停	梶原バス停	近畿	山陰海岸国立公園	兵庫県	豊岡市



計画されている<sup>21)22)</sup>。このトレイルは青森県八戸市蕪島から福島県相馬市松川浦までを結ぶもので、里道、林道などを活用するとともに集落地を通るルートでは災害時の避難路としても利用できる仕様を検討するとされている。また、利用形態として、全路線を歩き通す「スルーハイイク (through hike)」や、いくつか区切って歩く「セクションハイイク (section hike)」、鉄道、船舶などの連携利用、自転車利用などを想定して整備を進めるとされている。

## (2) ロングトレイル

近年、「ロングトレイル (long trail)」の整備が日本各地で進められている。ロングトレイルとは文字通り、長距離歩道である。アメリカではアパラチアントレイルやジョン・ミュアトレイルのように数百～数千 km にも及ぶ長距離歩道がいくつかの国立公園を結ぶ形で整備されており、それがバックパッカー（水平志向の徒歩旅行者）の第一人者である加藤則芳氏によって日本に紹介された<sup>23)</sup>。加藤氏の薫陶を受けた人々が日本でロングトレイルの整備に取り組みはじめた。2013年3月現在、日本ロングトレイル協議会に登録されているものは全国で10路線ある<sup>24)</sup>。そのうち代表的なトレイルとして、長野・新潟県境の関田山脈を走る信越トレイルがあげられる。延長約80kmの信越トレイルは、NPO 法人信越トレイルクラブが主体となって整備・管理が行われている。民間団体が主体となっているのが、従来の長距離自然歩道とは異なる。

地方公共団体が主体となっているトレイルもある。京都一周トレイルはその代表例である。京都一周トレイルは、京都の東南、伏見稲荷から、比叡山、大原、鞍馬を経て、高雄、嵐山、苔寺に至る全長約70キロのコースと、豊かな森林や清流、田園風景に恵まれた京北地域をめぐる全長約40キロのコースからなり、京都市をはじめ、京都府山岳連盟、京阪電気鉄道、阪急電鉄、西日本ジェイアールバス、京都市交通局、京都大阪森林管理事務所、京北自治振興会、京都市観光協会からなる「京都一周トレイル会」により整備されている。

信越トレイル、京都一周トレイルとも、現地の指導標識、案内地図などの施設整備はもとより、ガイドブック、専用地図などのソフト面も充実しており、歩きやすい道になっている。

もう1つの動向として歴史的な歩道の復元があげられる。熊野古道が2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部としてユネスコの世界文化遺産に登録<sup>25)</sup>されて以降、古道の復元と観光利用が盛んになってきた。同様な古道の復元は石見銀山から温泉津に至るルートでも行わ

れている。

## 6-3 提言

以上述べてきた山陰海岸ジオパークにおける歩道の現状及び他地域の動向を踏まえて提言を行う。山陰海岸ジオパークの歩道の整備・管理には、みちのく潮風トレイルや信越トレイルの事例がたいへん参考になる。

(1) 「海岸歩道についてはジオパーク全域を開通させ、支線で内陸に至る歩道を整備する」方針を打ち立てる。

それにより利用者には全路線踏破の意欲を掻き立てるとともに、管理者には1府2県が連携した施設整備意識の醸成も期待される。トレイルの全線開通には時間がかかると思われるが、まずは基本計画の立案が必要である。既存の自然歩道は最大限活用し、つながっていない部分について連結を図る。その際に、一部で車道脇歩道を使用することはやむをえないが、安全性・快適性確保のため歩道のない車道区間は解消させていくこととする。

(2) 「さまざまな交通機関との連携を想定した利用」を図る。

JR 山陰本線、自動車道、3箇所（浦富海岸、浜村港、香住港）で運行されている観光船などとの連携をとった利用形態を想定するとともに、自転車利用についても検討すべきである。さらに、シーカヤック利用との連携も検討すべきであろう。

海岸歩道は、その立地特性上、必然的に一方向への移動となる。徒歩による往復を避けるならば公共交通機関またはタクシーを利用して出発点に戻ることができるようにすることが重要である。また、自家用車利用による来訪者の場合には、信越トレイルで行われているような車の回送サービスも必要である。

(3) ソフトの充実

山陰海岸ジオパークのパンフレットはあるものの、ガイドブックと環境学習を兼ねた冊子は発刊されていない。信越トレイルではそのような冊子と全コースを3区間に分けた地図 (Trail Map) が有料で頒布されている。それらには、ルート地図、主な見どころ、危険回避のための情報、ビジターセンター、入浴施設、交通機関、宿泊施設に関する概略情報などが記載されており、旅行計画の立案や実際に歩く際の地図・ガイドブックとしての実用性を十分に備えている。山陰海岸ジオパークにおいてもそのようなガイドブック・地図の発刊が求められる。

また、信越トレイルの一部である斑尾高原では、斑尾

高原環境協会公認ガイドが有料でトレッキングガイドを行っている。料金は1日8時間以内が12,000円、半日4時間以内が8,000円である。このようなガイドは、利用者にとっては安全で質の高いサービスの享受となり、地元民にとっては自然環境保全等に対する意識向上と収入源としての意義を有する。

山陰海岸ジオパークでも各ビジターセンター等において、さまざまな利用者サービスが行われているが、今後は一層の量的・質的向上とジオパークとしての統一感の醸成が望まれる。

#### 6-4 今後の課題

本報告は、主に既存資料と一部現地踏査によって構成した。今後は、詳細な現地踏査や聞き取り調査にもとづき、具体的な自然歩道（トレイル）計画に資する調査研究が必要である。

### 7. ジオサイト（摩尼山）の国立公園への組み入れ方

#### 7-1 検討の前提

何故、国立公園への組み入れを検討するか？ またそのジオサイトは、何故摩尼山か？ はじめに、この2つの問題設定について、検討の前提として以下に整理しておく。

まず第1の問題については、2010年12月の（社）日本造園学会関西支部大会シンポジウムならびに2012年5月の（社）日本造園学会全国大会ミニフォーラムにおいて、山陰海岸ジオパークのマネジメントプランを議論した際、筆者は、広大な山陰海岸ジオパークが今後地域の誇りとして保全活用され、地域活性化に貢献するためには、区域全体のランドデザインとなる構想計画が必要と主張した。なぜなら、京都、兵庫、鳥取3県の各地域ともジオパーク地域戦略<sup>26)</sup>が無く、類似の振興策等が個別に進められており、したがって、連携よりも競合関係が危惧される状況にあったため、地域の役割分担、ジオパーク資源の保全整備の方針等が3県にまたがる行政、住民、関係企業等の間で合意形成される必要があると思われるからである。

この問題提起に対し、関西学院大学久野教授から、ジオパークの主要な区域は山陰海岸国立公園区域であるので、自然公園法による法定計画<sup>27)</sup>である公園計画があり、これがランドデザインの役割を果たすのではないかの指摘があり、会議では、この方向での検討が必要、と認識されたことによる。

次いでジオサイトは何故摩尼山か、についてであるが、摩尼山に関しては、鳥取環境大学浅川滋男教授の「摩尼寺奥の院遺跡」という精緻な研究成果があり、かつ摩尼寺奥の院遺跡に関するシンポジウム「山林寺院の原像を探る」（2011年12月17日仁風閣）で、この地域のグリーンツーリズムの視点からの保全・活用・整備の議論がなされたことに起因する。ジオサイト摩尼山に関する検討がこの場で一定なされ、この検討の発展がジオパークのこれからの展開に役立つと思われるからである。なおこのシンポジウムでの検討・提案などは、昨年度研究「山陰海岸ジオパークのマネジメントプラン－基礎調査と課題の整理－」に記載したところである。

以上を前提に、以下に問題提起の内容について検討する。

#### 7-2 ジオサイト摩尼山を、国立公園に組み入れるための方法

##### (1) 山陰海岸国立公園の現状と公園計画

自然公園のうち国立公園に関する責任と権限は、環境大臣が有する。

国立公園を定める場合は、環境大臣が、関係都道府県および中央環境審議会の意見を聞き、区域を定め、指定することになる。環境大臣は、指定の旨、区域を官報で公示する。指定の解除、および区域の変更についても、上記と同様、関係都道府県と中央環境審議会の意見を聞く必要がある。その変更については、環境省告示として公開される。

国立公園の公園計画および公園事業も、環境大臣が関係都道府県および中央環境審議会の意見を聞いて決定する。したがって、この公園計画は法定計画であり、必ず立案され、公園事業はこの計画に基づき実施される。

山陰海岸国立公園は、昭和30（1955）年6月20日に山陰海岸国立公園として指定され、昭和38（1963）年7月15日に山陰海岸国立公園に昇格指定された。また、昭和46（1971）年1月22日には海中公園地区の指定がなされた。

当国立公園は、京都府（京丹後市）、兵庫県（豊岡市、香美町、新温泉町）、鳥取県（鳥取市、岩美町）の3府県3市3町にまたがり、東西約75km、面積8,783ha、このうち海中公園地区は5地区6箇所合計67.2haとなっている。小面積の国立公園であること、細長く東西に連続しており全域に共通する事項も多いことから、一公園一管理計画区（山陰海岸全域管理計画区）として取り扱われている。

26) 平成23年12月糸魚川市が策定した「糸魚川ジオパーク戦略プラン」は内容が濃い

27) 法定計画とは、法律を策定根拠として策定する計画



平成2（1990）年4月6日に公園計画の再検討が行われ、平成8（1996）年12月25日には1回目の公園計画の点検が、平成18（2006）年12月26日に2回目の点検が行われている。

公園計画の内容は、通常1. 保護規制計画、2. 利用施設計画、に分けられる。

(2) ジオサイト摩尼山を国立公園に組み入れるための方法  
ジオサイト摩尼山（鳥取砂丘ジオエリアの区域に入っており、今はジオサイトとして取り扱われていない）が国立公園の区域に入り、公園計画として取り込まれば、ジオサイト摩尼山区域の保全・活用・整備の大きな道筋ができる。また、区域編入が情報提供されることにより、観光客誘因のパワーを持つことも期待される。

国立公園に組み入れるための方法は、環境大臣（実務は環境省・近畿地方環境事務所等が行う）が区域変更の必要性を中央環境審議会（自然環境部会・自然公園小委員会）・都道府県に示し、意見を聞いた上で決定することになる。しかし区域見直しにかかる実際の順序は、特に拡大については地元自治体が必要性を国に働きかけ、国がこれを認めて、手続きを進めるというのが実態であろう。

したがって、摩尼山区域の拡大に関しては、鳥取県および鳥取市が、その自然性を根拠に山陰海岸国立公園の区域に組み入れるための論拠づくり（区域の現況調査—自然環境・水・地形地質・景観・動植物等、および社会的条件として土地所有・規制状況・歴史文化資源・道路等公共施設状況・観光施設・観光利用状況等）や、公園計画案の検討（規制計画・施設計画）を行い、地域の合意形成を図り、国（環境省）に陳情等の活動を行うことが必要となる。ここで留意すべき点を指摘する。その第1は、すでに国立公園としての全般的な見直しが平成2年に終わっており、また、概ね5年毎に実施する定期的な点検作業も、平成8年、平成18年が終わっており、また平成23（2011）年の点検も事務作業的には終了していると考えられることから、平成28（2016）年度の見直し点検を目標に、所要の取り組みを早急に進める必要がある、という時期的な問題である。とくにジオパーク区域になったという環境変化は、見直しの契機となるものであるため、早急な取り組みが求められる。ただしこれは、国立公園以外の3県のいろいろな地域でも言えることではあるが。

次に留意すべき第2は、仮に国立公園に組み込まれたとして、保護規制は一定成果があるとしても公園事業としての整備（施設整備）等は、非常に限られた国費の中ではなかなか進まない実情がある点である。ちなみに（自

然）公園事業費は、国費ベースで管理費3.1億円、自然公園等事業費95.2億円、で計約100億円弱（2011年度予算）〈これは国立公園予算だけでない〉であり、（都市）公園事業費のうち国営公園事業の国費本省分218.5億円（平成23（2011）年度予算）〈このほか北海道開発事業費の国営公園関係8.3億円、地方整備局国営公園事業工事諸費約18.2億円等がある〉と比べても、自然公園対象面積が大きいだけに、自然公園事業費の整備推進力は小さいといわねばならない。

なお、環境省 HP によると、国立・国定公園の公園区域及び公園計画の見直しの種類については以下の3種類（表4）があり、今回の摩尼山については、〈一部変更〉という種類の変更という扱いになると思われる。一部変更の要件は2つ目の「政策的に規制又は施設整備を早急に進めるため」、あるいは3つ目の「離島振興法に基づく離島振興計画や他の地域振興計画が策定又は変更され、自然的、社会的実状に照らして当該公園の保護又は適正な利用に資すると認められる場合」という事由に適用させるしかなく、このためにも、地元住民、自治体の陳情等の活動、県・市の自治体による地域振興計画等の立案、本区域でのジオパーク関連、文化財保護法関連、都市計画関連等の連携の熱いムーブメントがあることが条件となろう。

### 7-3 摩尼山を国立公園に組み入れる際、そして組み入れた後の展開

前記したように法定計画である自然公園計画に位置付けて、摩尼山区域を保全整備し、地域振興していくことは、みんなにわかりやすいシナリオであり、またインパクトも大きいと評価される。一方、そのような展開が実現するためには、地域（自治体・住民）の熱意のある取

表4 公園区域及び公園計画の見直しの種類

再検討	昭和48（1973）年11月21日以前に指定された国立・国定公園について、自然的・社会的条件の変化に対応して行う、当初の公園区域及び公園計画（以下「公園計画等」という。）の全般的な見直し。
点検	再検討後、概ね5年毎に実施する定期的な公園計画等の見直し。
一部変更	以下のような理由により、公園計画等の一部について見直しを実施することが必要な場合において行う、所要部分のみの公園計画等の変更。 ・災害若しくは突発的事情の発生、又はそのおそれがある等により、公園の適正な保護及び利用の安全の確保等の観点から、早急に公園計画等の変更の必要が生じた場合。 ・環境省が自然公園の保護または適正な利用の観点から、政策的に規制又は施設の整備を早急に進めるために公園計画等の変更の必要が生じた場合。 ・離島振興法に基づく離島振興計画や他の地域振興計画が策定又は変更され、自然的、社会的実状に照らして当該公園の保護又は適正な利用に資すると認められる場合。

り組み、科学的資料の整理、国への積極的働きかけなど、ムーブメントが必要である。

その際、筆者は多元多重型の地域計画の立案がまず必要ではないか、と考える。

150万人都市である神戸は、中心市街地のすぐ後ろが瀬戸内海国立公園六甲区域である。しかし六甲山系は、自然公園法で守られ、自然公園事業で整備されたわけではない。戦前の大水害を契機に、国の直轄砂防事業が山を緑化し、風致地区、近郊緑地保全区域、特別緑地保全地区といった都市計画関連の緑地制度が開発から緑地を守り、拠点となる歴史資源は文化財として守り、また利用拠点には都市公園が整備され、これらが国立公園制度の規制計画、集団施設地区等の施設計画と相まって、現在の安全で快適な大都市神戸の骨格となる緑地帯を形成している。さらに、景観面での規制誘導をより積極的に図る目的で、「緑地の保全、育成及び市民利用に関する条例」が平成3（1991）年4月に創設され、神戸独自の緑によるまちづくりが推進されている。

都市規模が違い、自然や歴史も大きく異なるが、鳥取市街地背後を成す山系、久松山～摩尼山の位置づけは、神戸市と類似の点もある。国立公園だけでなく、歴史文化資源として文化財保護法や景観法の対象となるものであり、都市近郊の自然の保全と活用という面では都市計画の対象である。そして世界ジオパーク区域である。

1つ1つの制度では限度のある保全整備も、これらの制度をうまく活用し、多元的に運用し、地域に多重的に適用することで、総合的な効果を発揮することが期待される。

その連携のとれた運用・適用のイメージは以下のように考えられる。

- 1) 国立公園への編入を想定する地域の基礎調査（自然条件調査、社会条件調査、その他必要な調査）を実施し、現況を把握（県・市環境部局、ジオパーク部局）
- 2) 現況を元に自然公園区域変更案および公園計画変更案の地元素案を作成（県・市環境部局、ジオパーク部局）→平成28（2016）年度の変更を目標に地元の合意形成
- 3) 摩尼寺「奥の院」遺跡を中心に史跡指定の検討、史跡保全整備計画案を作成（県・市文化財部局・大学も協力）
- 4) 久松山～摩尼山の緑地計画（史跡公園等整備構想）を検討立案（県・市都市計画部局）
- 5) 上記を総合化した摩尼山ジオサイト戦略プランの立案と活動母体の形成（県・市ジオパーク部局）→ジオサイト戦略プランは、ジオパークマネジメントプランのひな形、モデルとして取り組む

- 6) 地元で戦略プランをもとに活動を展開、各計画の推進を国・自治体に陳情（地域）
- 7) 国立公園変更案、ジオサイト戦略プランを中心に各省に実現と支援を働きかけ（環境省、文部科学省、国土交通省、経済産業省等に対し関係部局、地域がそれぞれ連携して働きかける）
- 8) なお摩尼山ジオサイト戦略プランの空間構想模式図は以下（図4）が想定される。

## 8. 山陰海岸ジオパークの法定計画

### 8-1 ジオパークへの参加理由

山陰海岸ジオパークの面積2185.9km<sup>2</sup>の内、地域制緑地制度、文化財保護法などの法律で、規制誘導が図られているのは造園学会のミニフォーラムで久野先生が指摘された通り、僅か4%の約87km<sup>2</sup>に過ぎない。換言すれば残りの2098.5km<sup>2</sup>は、市街地、市街地調整区域、無指定地区などの、いわゆる住居・農・工・商業地からなる一般的な都市空間で、ジオパークに関わる地形地質の保全、風致の保全などに関わる規制誘導は明確ではない。

それでは、なぜこのような広い面積にわたって、ジオパークのエリア指定をしたのか、ヒアリングから浮かび上がった理由は次の通りである。一つは「出来るだけ広域にエリア指定した方が、将来、新たに誘発された観光・産業に対する対応が好都合であること」、つまり網を広く放つほど獲れる魚は多いということである。

二つは「ジオパーク内に広がる各地域の有名観光地、景勝地を包括する」という考えに基づくものであろう。山陰海岸はカニの猟期には賑わうが、その他のシーズン



図4 摩尼山ジオサイト戦略プランの空間構想模式図



はもう一つである。また、今日の不況の影響を受け、山陰地方の温泉地などの観光地は客数が減っている。抱える問題の対策としてジオパークが歓迎されたわけである。事実、世界ジオパーク登録後、各市町から入れ込み客数が微増したと聞く。

三つは「それほど名を成していない地域でも、ジオパークのエリアに入れてもらえば将来の地域発展の推進力になる」という考えがあったのではないか、つまり、ある地域では起死回生策として捉えられたのである。

このようにジオパークエリア指定の期待は大きい。しかしながら、現実的には、エリア全域を捉えると法律の規制誘導も十分ではなく、野放図に近いものであることには変わりがない。そのなかの選りすぐった風光明媚な地がジオサイトに指定されている。

## 8-2 ジオサイトの法定計画

このような状況から、ジオサイト全域を法定計画に定めることを提案する。鳥取県の摩尼山には指摘したように、巨石と奥の院の景観・古刹などの資源がある。隣接する久松山には鳥取城の史跡公園の復元整備が進められている。そこは都市公園として指定されている。ところが、これらはジオエリアに指定されておらず、山陰海岸自然公園区域からも外れている。

そこで、これらを核として、既に摩尼山研究で提案されている文化財保護法による名勝の指定を、そして、これらを囲むような森林を風致地区、或いは自然公園に、出来れば山陰海岸国立公園区域に組み入れてもらいたい。摩尼山ジオサイト戦略プランを実行する。

頂上部の自然資源は、自然公園法の1種指定区に匹敵する歴史資源の価値を有することから、導入の理由は妥当であろう。また、鳥取県には里山保全条例を策定して頂き、摩尼山・久松山の森林を里山保全林として位置づけ整備して行く。方法はフォーラムで久野氏が提案された通り、鳥取県が計画をとりまとめ、環境省に提言すればよい。

## 9. エリア全域を捉えた経営組織のあり方

### 9-1 経営の問題

エリアを管轄する6市町のヒアリング調査では以下のことが明らかになった。それぞれの行政域では役場・公益法人・NPO・民間企業・学校・研究所など様々な組織が存在する。これらは産・官・学に大別され、組合・協会・連盟・教育委員会などに組織化されている。

こうした多様な組織が存在するエリア一帯をジオパークに指定した。それは、後出しのジャンケンのようなものであることから、巨大化した市街地空間に網の目のよ

うに構築された組織の操作が難しいところである。

問題は、これら多様な組織が、目的・組織の仕組みが異なることから、同様の作業が、別々の組織で重複して行われている。例えば各市町には商工観光課、観光振興課などの類似セクションがあり、ジオパークの事務業務を執り行っているが、それを府県レベルで見ると人件費が重複していると言えないか。

また、広報活動を見ると、冬場になればカニの宣伝で、こぞって鳥取・兵庫・京都の関係者は同様な広告を打つが、それは、それぞれの地元にお客様を誘致したいから、そうなのであろう。しかし、これを統一した広告媒体で行うとすればどうだろうか。お越しになるお客様の数は異なるかも知れないが、少しは広告経費の無駄が省けないか。

昨年度の研究ではアンケート調査において、組織内に競争意識を望まずの意見があり、組織の作業の効率の悪さが指摘される。やはり収益を上げるには競争原理が機能する組織へ改めなければならない。評価されるのは、JR西日本が鳥取・兵庫・京都を結ぶジオライナーを運営してくれることだ。このような事業を増やしていかなければならない。

### 9-2 ジオエリアに地域制法律の導入による地区指定と運営会社の設立

それでは、このような問題を解決し、エリア全域を統括する組織構築の課題を考えてみよう。一つはジオパークの拠点となるジオエリアに、地域制法律に基づく法定計画を策定し、地区の管理に指定管理者制度を導入することがあげられる。その場合、公園経営に基づき、运营管理と維持管理が両立する組織を目指さなければならない。論者は鳥取市の指定管理者選考委員を仰せつかり、その経験から、維持管理には工夫されるものの、运营管理のプログラムは十分ではなく、施設の誘引度(魅力)を高め、収益を上げる意識は低い印象を受けた。

その場合、指摘したジオツーリズム、環境教育などの管理運営プログラムを充実していかなければならない。このようなことから、山陰海岸ジオパークジオエリアの法定計画を策定し、そこに信賞必罰の競争原理が働く、运营管理を重視した指定管理者の導入を提案する。もちろんエリア内外に位置する行政・企業・NPOの参画を期待する。

二つは、ジオパーク運営会社の設立があげられる。見本は(株)ファームがとる経営手法だ。見本は「堺・緑のミュージアムハーベストの丘・大阪府堺市」、「平成記念公園『日本昭和村』・岐阜県美濃加茂市」、「伊賀の里モクモク手づくりファーム・三重県阿山町」、「阿蘇ファームランド・熊本県長陽村」などが上げられる。論者が公

園緑地のマネジメントの先進事例調査で判明したプロジェクトでもある。経営手法は公設民営、或いは民設民営の手法をとり、面積は30haから100haに及び、年間客数は30万人から390万人、売り上げは30億円から45億円と聞く<sup>28)</sup>。民間施設ゆえに利益が出ているから今日に至っている。ここに公園経営の見本がある。

### 9-3 競争・成果主義に基づく経営の実践

(株)ファームが経営する施設は、飲食・買い物・クラブ・遊戯・酪農・環境学習・入浴・スポーツ・キャンプなどの施設が設置されている。お客様は家族揃って来られ、買い物・食事・遊びなどを楽しむ。いわば家族揃って大型店舗に出かける感覚で利用されている。新鮮なお野菜などの購買やファーストフードなどを楽しむといった普段の生活スタイルがそこに求められている。

以前、(株)ファームの経営組織、経営方法にヒアリングを試みたが拒否された。しかし、その経営手法はパンフレット、書籍を見ればわかる。これらを参考にし、導入施設・機能を選び、ジオエリア運営の会社を設立する。組織は総務・企画・運営・販売・施設管理などの組織が必要だが、縦割りではなく横断的組織とする。職員は掛け持ちを基本とし、ノルマを設け、競争意識を持たせる。経験を積めば正規職員に登用する。その場合、トップダウンではなく、職員自らが企画し、運営するようにして責任感を持たせ、その成果を評価する。経営陣はすべて公募とし天下りは認めない、しかも単年度契約、歩合制とし、売り上げに応じて年俸を決定する。将来を見据えるからには、活気ある組織にすることが求められる。このような機動力、生産力が充実した会社を立ち上げ、ジオエリアを経営していく。

## 10. 新たな収益事業による財源計画

### 10-1 ツーリズム事業への期待

行政は収益事業を行うことは出来ない。「行政がアイデアを出し、地元の民間企業が新規事業を起こし、税収入を増やす。」という考えがあるからだ。そこに行政が収益事業を行えば、対抗する企業の収益を奪うことになる。しかしながら、ヒアリングではNPO組織を立ち上げ、収益事業チャレンジの声を聞く。視点は、環境学習のツアーコンダクター・インタープリター・ガイドなどにある。言わば教育委員会が担う領域での収益事業ゆえに、民間企業が手を出しにくいことから、これら領域へのNPOの事業参加は良策と言える。

このような自然空間を対象にして新たな収益事業を考える場合、考えなければならないのは社会の動き、潮流

であろう。自然ふれあいの趨勢が高まることから、一つはツーリズム事業があげられる。奈良県の大台ヶ原では、頂上部に散策登山の拠点が集中しているものの、宿泊施設は山裾に散在し、観光客は自動車で頂上に来て、散策などを楽しんだら、そのまま帰るパターンが定着している。広幅員の登山道路が整備され、登山時間が短縮され、多くの観光客をバスで運べるようになったものの、多くの観光客は麓に戻り、帰ると言う日帰り観光になってしまった。つまり、観光客は増え、登山時間が増えたものの観光客は宿泊施設を利用しなくなったのである。

そこで、環境省が取り組んだ大台ヶ原ツーリズムモデル事業が参考になる。大台ヶ原の頂上、山裾に広がる観光地を巡るツーリズムを組み、ツアーコンダクターを配し参加者を募ったのである。大台ヶ原の魅力をじっくりと楽しんでいただいた。観光客が急に集まり、お金を落とすという性格ではないが、自然とふれあい、ゆっくりとした時間の経過を楽しむ小旅行で、従来の金銭消費型のツアーとは一線を画す。

二つはこれらを拡大したグリーンツーリズム事業があげられる。ツアーの目的を滞在型とし、宿泊は農家を利用し、そこに泊まりながら近辺の観光地のツーリング・サイクリング・トレッキングなどを楽しむ。山陰海岸では中国自然歩道が発達していることから、これらを活用してジオパークの広域レクリエーションを楽しむ。

その場合、山陰海岸ジオパークの遊歩道はロングトレイルの可能性を持つ。現状は寸断され連続性に乏しい。歩道のない車道を歩くところさえもあるが、こうした資源を有効に活用していかなければならない。

### 10-2 寄付金事業の展開

地域の資源を活かした寄付金事業が望ましい。論者が携わった京都商工会議所の京都小倉百人一首歌碑建立事業野外文芸苑の財源確保策を紹介しておく。京都商工会議所の創立120周年記念事業として平成15(2003)年から19(2007)年にかけて行われた事業で、今日の新たな京都観光の名所となり、多くの文学ファンを呼んでいる。平安時代、京都小倉山麓の嵐山嵯峨野に位置する時雨殿で、藤原定歌が百人一首を編纂し、今日のカルタ普及の礎を築いたことは知られている。

そこで、京都商工会議所は百首の歌を歌碑に刻み、選歌集毎に従い、嵐山嵯峨野境界の公園・広場などに配置した。事業費は歌碑一基につき300万円の寄付を企業に募ったところ、3億円が集まった。企業にその理由を聞くと、「京都で仕事をさせてもらっているお礼の気持ち」と返ってきた。ここに京都企業の矜持を見る。

設計は昔からそこにあった野石に何か字が記され、近づいて読むと「あつ、これは百人一首だ」と、気付くようにした。つまり、見えない歌碑にしたのである。名勝地ゆえの配慮だ。このような方法を名勝地でもあるジオパークでも検討したらどうか。

## 11. 新たな管理運営プログラムの計画のあり方

### 11-1 眠れる資源を掘り起こす

眠れる資源を掘り起こして成功した事例を見てみよう。兵庫県伊丹市に野鳥公園で知られる昆陽池公園がある。天平3（731）年に行基が掘った灌漑池だが、阪神間ではシベリアからの渡り鳥の飛来地として知られていたことから、昭和47（1972）年に、野鳥公園として整備され、自然再生の先駆けの公園として注目され、野鳥の島としてつくられた日本列島のある昆陽池公園は、大阪国際空港離陸コースの直下にあることから知られるようになった。今日、野鳥観察、環境学習プログラムが充実した公園として知られている。ここでのキーワードは「池」と「鳥」である。

新潟県の村上町は町屋建築で知られる歴史深い町であるが経済が低迷し、観光客も激減していた。商店街は困り果てたが、若き商店主が活性策として「人形を活かしたまちづくり」プロジェクトを立案した。それは町屋の蔵に眠る雛祭りの人形を町屋に飾り、観光客を呼ぶという見学コースを実践したのだ。薄暗い町屋の大広間に人形を飾り、間接照明で人形をほんのり照らす。すると、人形の微笑む顔がくっきりと浮かび上がり、なんとも言えない美の世界が広がったのである。すると、静かに人気を呼び、次第に口コミで広がり、盛況時には臨時列車が出るようになり、村上町は一躍「人形の町」として知られるようになったのである。ここでのキーワードは「町屋建築」と「雛人形」である。

### 11-2 山陰海岸ジオパークにおける新たな方向性

それでは山陰海岸ジオパークの眠れる資源を見てみよう。豊岡の玄武洞、コウノトリ公園などは成功例として知られている。

新たな視点として、ジオパーク内の林業資源を活かした滞在型芸術村の可能性があるのでないか。小規模なものは存在するが、木工・陶芸・彫刻・絵画などを始めとした芸術を総合的に楽しむクラフトセンターみたいなものへの期待が高まる。これらの施設は手作りとし、お越しになるお客様が自ら整備に参加するというシステムを取ればピーター率が高まろう。つまり、造るシステムそのものをレクリエーションに転化するというもので、

芸術を楽しむ方々のライフスタイルを組み込んでいく。

現地には既に豊岡の柳行李細工、鳥取では民芸活動が知られ、湖山池公園では環境学習が盛んである。しかしながら、水質浄化のための水門が開放され海水が入り、生態系に変化が起きるなど課題も多い。こうした現状を踏まえて、ジオパーク利用の運営管理プログラムを整備していかねばならない。

## 12. 新たな評価の視点

従前の視点は入れ込み客数と経済効果で、それは今日でも変わらない。今日の経済不況、高齢化の進行、人口減少の状況から、地域活性策として観光は最優先課題で、ヒアリングにおいても経済再生策として、世界ジオパークへの登録の期待が大きかった。

しかしながら、いつまでも経済を念頭に置くのではなく、別の視点からの評価軸が必要である。それに憧れて次第に人が集まり、地域が活気付くというスタイルが理想だ。一つは「時間のゆとり」があげられる。つまり、生活時間にゆとりを持たせ、のんびりと家族と過す時の大切さが評価の視点になる。「田舎で暮らそう」をキャッチフレーズにして、移住者を増やすことで、岩美町が成果をあげている。多極分散型の国土政策に合致し、住環境が整う自然豊かな地域は、職場環境さえ整えば絶好の移住地となり、岩美町は住宅支援策をとる。

二つとして「作る喜び」みたいなものがあるのではないか。「そこに行けば、好きなものが作れる」という願望が満たされる。宿泊型の農園が流行ったりするのが好例であろう。作り完成させ収穫する、あるいは芸術作品として認めてもらうなどは、作る喜びの骨頂である。その場合、既存文化施設のさらなる活用が望まれる。

ジオパークの地元の評価は経済であることは変わりないが、お客様の行為・活動はお金を使う飲食・購買から、徐々にではあるが、内容が変わりつつある。滞在しての体験学習、創作活動などが該当する。これらは個人満足度の評価軸であり、今後も多様化していくものと思われる。ここに新たな評価のあり方が隠されており、これからはお客様の意見・ニーズをきめ細かく分析して行かねばならない。

## 13. 新たな理念・ミッションのあり方

何事も「理念」と「ミッション」は重要だ。観光地に行けばどんなことが待っているのだろうか。人々は旅に出る前から思いにふける。理念には当地の持つ魅力を、コンパクトな文章で相手に伝える役目を持つ。キャッチフレーズでもある。



時代が変わろうとも、陳腐化しないものにしなければならない。その場合、オリジナリティを持たすことである。山陰海岸ジオパークでは「日本海誕生の痕跡を見る」と、ダイナミックで歴史深さを感じる。そこにマネジメントの魅力を加えたい。魅力は、食・温泉・環境学習の他にもあるはずだ。今日の金銭消費型からグリーンツーリズムにシフトしてきたニーズを探ることにより辿り着く。俳句調ならば覚え易い。

課題はお客様のターゲットである。これからは高齢者と子どもに絞らねばならないか。対象は65歳から75歳までのアクティブなシルバー層を狙う。財力もあり経済効果に期待が持てる。子どもは臨海・林間学校の復活だ。このようなターゲットに絞り、時代の流れを読みマネジメントを考え、新たな理念・ミッションの方向性を探っていかなければならない。

#### 14. 謝辞

本研究を進めるにおいて、高知県室戸市、鳥取県鳥取市・岩美町、兵庫県新温泉町・香美町・豊岡市、京都府京丹後市のジオパーク関係者にご協力を賜りました。ここに衷心よりお礼申し上げます。

なお、本稿編集におきまして本学流域ランドスケープ研究室の森脇勇貴君の協力を得たことを付記しておきます。

#### 参考文献一覧・説明

- 1) 中橋文夫 (2013) 「山陰海岸ジオパークのマネジメントプランを探る」『ランドスケープ研究』vol. 76 No.4, p. 346
- 2) 室戸ジオパーク推進協議会事務局「室戸ジオパーク－世界ジオパークを体感する、高知県東海岸へ－」(パンフレット) (2011)
- 3) 室戸ジオパークインフォメーションセンター「室戸ジオパーク－室戸半島は海だったの?－」(パンフレット)
- 4) 室戸ジオパーク推進協議会「室戸ジオパーク－地球の息吹が聞こえる。－」(パンフレット)
- 5) Komoo and Patzak (2008). *Global Geoparks Network: An Integrated Approach for Heritage Conservation and Sustainable Use*, Leman, M. S., Reedman, A. and Pei, C. S. eds. *Geoheritage of east and southeast Asia*, Ampang Press; 1-13.
- 6) ナショナルジオグラフィック HP (URL: 2013年3月15日現在) <http://www.nationalgeographic.co.jp/>
- 7) 横山秀司 (2010) 「ジオツーリズムとは何か－ドイトにおけるその展開－」総合観光学会編『観光まちづくりと地域資源活用』同文館出版、pp. 115-129
- 8) Nickolas C. Zouros (2010). *Geotourism in Greece: A case study of the Lesvos Petrified Forest Geopark*, Ross Dowling and David Newsome eds. *Global Geotourism Perspectives*. Goodfellow Publishers Ltd: 215-229.
- 9) Natural History Museum (2007). Guide to the Lesvos Petrified Forest Park, Natural History Museum of Lesvos Petrified Forest.
- 10) 田中寅夫・星見清晴・松田晃幸 (1994) 『鳥取砂丘ものがたり』鳥取市社会教育事業団
- 11) 内藤史朗訳(1973)『世界教育学名著選18－ラスキン、モリス』明治図書
- 12) 木田元 (1993) 『ハイデガーの思想』岩波書店
- 13) 神戸新聞但馬総局編 (2010) 『山陰海岸ジオパーク』神戸新聞総合出版センター
- 14) 柳宗悦『手仕事の日本』(1985)(岩波文庫) 岩波書店
- 15) 次の文献も参照されたい。(1986) 水尾比呂志編『柳宗悦民藝紀行』岩波書店
- 16) 鳥取民藝協会編(1998)『吉田璋也－民芸のプロデューサー』牧野出版
- 17) 志賀直哉 (1928) 『小僧の神様 他十篇』岩波書店
- 18) 志賀直哉 (1990) 『暗夜行路』新潮社
- 19) 環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室・日本環境教育フォーラム (2011) 『長距離自然歩道を歩こう! 中国自然歩道版』環境省 p. 79
- 20) 環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室・日本環境教育フォーラム (2009) 『長距離自然歩道を歩こう! 近畿自然歩道版』環境省 p. 77
- 21) NPO 法人信越トレイルクラブ (2012) 『公式ガイドブック信越トレイルを歩こう! 改訂版』長野 p. 131
- 22) 環境省みちのく潮風トレイル HP (URL: 2013年3月28日現在) <http://www.tohoku-trail.go.jp/index.html>
- 23) 加藤則芳 (2000) 『日本の国立公園』平凡社 p. 270
- 24) 日本ロングトレイル協議会 HP (URL: 2013年3月28日現在) <http://outdoor-ld.jp/lta/trail.html>
- 25) 小山靖憲 (2000) 『熊野古道』岩波書店 p. 208
- 28) 中橋文夫 (2006) 『公園緑地のマネジメント』学芸出版社 p.99

(受付日2013年10月9日 受理日2013年12月27日)